

福山市小中一貫教育推進懇話会（第1回）会議録

日 時 2012年（平成24年）6月5日（火）
午前10時

場 所 福山市役所 東棟3階 304会議室

出席委員 9名

出席又は欠席	名 前
出席	小 原 友 行
出席	貝 田 哲 郎
出席	小 森 密 寿
出席	山 崎 俊 章
出席	飛 田 洋 悟
出席	小 野 方 資
欠 席	松 本 茂 太 郎
出席	藤 本 和 士
出席	小 野 明 人
出席	岡 本 康 成

会議に出席した事務局職員

教育長	吉 川 信 政
管理部長	石 井 康 夫
学校教育部長	三 好 雅 章
学校教育部参与	石 口 智 志
社会教育部長	山 口 善 弘
総務課長	西 頭 智 彦
学事課長	宮 本 浩 嗣
指導課長	伊 原 秀 夫
指導課教科指導担当課長	宇 根 一 成
社会教育振興課長	門 村 吉 晴

1 開会

- ・吉川教育長挨拶
- ・小中一貫教育検討委員紹介
- ・設置要綱により座長，職務代理者を指名
事務局からの指名により小原座長，飛田職務代理者に決定
小原座長，飛田職務代理者挨拶
- ・会議の公開について取り決め
原則：公開

※非公開情報に関する協議，公開により公正，円滑な協議等が著しく阻害され会議の目的が達成されないと認められる場合は非公開

2 説明

- (1) 目的
- (2) 福山市学校教育ビジョンⅣの概要
 - ・ビジョンⅢからビジョンⅣへ
 - ・5つの重点目標
 - ・義務教育9年間を一体的に捉えた教育活動の展開をめざす小中一貫教育の創造
[スケジュール，内容（小中一貫教育カリキュラムの作成・実施，推進体制）等]
- (3) 本市学校教育の現状
 - ・確かな学力 ・豊かな心 ・健やかな体 ・力量ある教職員
 - ・市民から信頼される学校
- (4) 小中一貫教育に係る取組状況
 - ・中学校区編成 ・小中一貫教育推進教員の状況 ・各中学校区の状況 ・市全体の状況

《質疑等》

(小原座長)

3点あります。1点目についてですが，本日の資料は子ども達の現状や課題についてまとめられていますが，子ども達の長所や向上させたい力などについての資料はありますか。例えば，読書活動が活発であったり，多様な博物館を活用した学習会への親子での参加率が高いなど，良い面でのデータがあれば説明して下さい。

2点目は，「基礎・基本」定着状況調査についてです。これはA型学力と呼んでいる知識・技能の測定になります。この結果を広島県と比較していますね。少人数の地域であれば，点数の変化がはっきり見られると思いますが，子どもの多い福山市ではそうではありません。例えば，8割以上を仮にA層，6割以上をB層，6割未満をC層，3割未満をD層と考えた場合，各層への分布状況によって対応が変化してきます。広島県との比較も大事であると思いますが，分布状況の分析について説明して下さい。

3点目は，不登校の問題についてです。不登校児童生徒数は，小学校から中学校1年生で急激に増えるということがあります。しかし，実際は中学校で突然に増えるのではなく，小学校3，4年生から既に兆候があるのではないかと思います。小学校では先生や保護者が抑えることで兆候は治まりますが，中学校へ進学したときに表面化していると考えますので，慎重に観察する必要があると思います。小学校と中学校が連携し，指導することで，中学校入学時の問題行動等の発現を抑え，中学校3年生時に未来を選んでいけるようになるのではないのでしょうか。将来の進路にも関わる中学校3年生で表面化するよりも，中学校1年生の段階の方が対応できることも多いです。小学校段階での兆候も観察する必要があると思いますが，調査・分析したデータがありますか。

(教科指導担当課長)

1点目についてですが、本日は調査・分析結果を持っておりませんが、先ほど説明させていただいたスクールサポートボランティアの方々には、多くのご支援をいただいています。

例えば、子ども達が体験活動等に取り組むことによる、地域の良さの発見など、活動をとおして、確かな学力や豊かな心が育っていると考えております。また、全国大会や様々な賞を受賞している子ども達、学校数も本市教育委員会のホームページに掲載しております。また、環境教育等に係る、文部科学大臣賞等の受賞などが結果として現れているのではないかと考えております。

2点目の「基礎・基本」定着状況調査についてですが、通過率が30%未満の子ども達を減少させる取組をビジョンⅢで取り組んでまいりました。その成果は、少しずつ表れていると考えております。

3点目の不登校等についてですが、本日、具体的なデータ等はありませんが、小学校3・4年生から兆候が表れていると考えております。

(小野_明委員)

学校と地域の関係性について、小学校の前段階である保育所の時点で既に問題行動をとる者が、中学校までその状況が続いているケースが多いと感じています。地域と学校との連携が重要であり、保育所から小学校の低学年までの子ども達を地域で見ていると、精神的に不安定な子どもや問題行動を起こす子ども等、子ども達の状況が分かります。子ども達の情報が教育委員会にどのように伝わり、対応しているのかについて説明して下さい。

(教科指導担当課長)

保育所、幼稚園と小学校、中学校のつながりについてですが、就学前の公立保育所、幼稚園においては、小学校との連携のために様々な行事に取り組んでいます。課題のある子ども達の状況を改善するため、各小学校区の就学前施設では幼稚園と小学校の合同研修を計画しています。ビジョンⅣのスケジュールにあります。小・中学校の9年間だけでなく、就学前から高等学校、大学も見据えた小中一貫教育を進めていきたいと考えています。

(教育長)

小学校1年生と幼稚園、保育所の子どもたちが一緒に活動する等の取組が増加しています。また、公立の幼稚園については、小学校長と園長が兼任であったり、退職された校長先生方に園長として勤務いただくことが多く、小学校と幼稚園の情報交換はずいぶん進んでいるのではないかと考えています。小学校長と兼任している幼稚園では、入学してくる子ども達の状況を把握し、迎え入れています。私立幼稚園については、日常的な情報交換はしておりませんが、2、3月には園長や担任の先生に来ていただき、小学校の教諭と入学する子どもの情報の引継ぎを行っています。

(小野_明委員)

生活面で不安定な家庭が増加している状況で、課題のある子どもには保護者からの影響もあると思います。子どもだけでなく、保護者についても学校や保育所が対応に苦慮されている部分もあると思います。地域が見て見ぬふりをしたために、その後、対応の難しい子ども達が育ってしまうことがあります。そのような課題を個人で改善することは難しく、意見具申ができる体制が必要ではないかと思えます。行政についても、問題がやっと見えてきた3、4年間で担当が交代するなど、矛盾が感じられますね。

3 協議

テーマ「変化の激しい社会を生きる子ども達に求める姿」について

《質疑等》

- (小原座長) 変化の激しい社会を生きるというのは、何年後を想定されているのですか。10年、20年後を想定されているのか、また、50年後であれば子ども達は高齢者になりますね。50年後の人口は1億2千800万から8千700万になると推定されていますし、高齢化率が23.9%から39.8%程度になり、約4割が高齢者になると想定されています。
- (教科指導担当課長) それとも、今の子ども達が社会人となる10年、20年後の社会を想定して、福山の子供達をどう育てるかという視野で検討をすすめるのですか。
- (小原座長) 具体的に何年後という数値は設定していませんが、今の子ども達が社会人となった時に、社会で活躍するために取り組むべき事についてご意見をいただければと思います。
- (小原座長) 来年、子ども達の進学率を上げるということではなくて、10年、20年の期間のなかでということですね。
- (小野^方委員) 寝屋川市の教育委員会を訪問したときに、学力が非常に心配であるという話を伺いました。大阪ベースで行っている学力調査の分析によると、フタコブラクダ型の分散が見られ、通過率30%の層にケアをするということで効果が見られたとの説明がありました。現場でも対応に苦慮されたのではないかと思います。分散の状態によって対応が異なります。厳しい状況にあるところに手厚いケアをすることがフタコブラクダ型の改善のためには重要であると考えます。全体的に課題があるのであれば、全員が頑張らなければならないと思います。
- (小原座長) また、フタコブラクダ型において、勉強することが厳しいという家庭は、生活困難な家庭が多く、学校だけでの対応では不十分のため、スクールソーシャルワーカーの活用等、福祉行政との連携事例が紹介されていました。雇用が安定しない状況もあるなかで、学校がどのようにワンストップとなり、地域がどのように支えるのが重要になります。その結果が学力という形で現れ、観察する指標として見られるのであり、学力のみを目的とすると難しいのではないかなと思います。
- (教科指導担当課長) まず、分散状況について説明して下さい。次に、分散について観察があれば、生活が困難な家庭との相関関係などの分析がありますか。
- (小原座長) 学力の二極分化ということがPISAの調査などで言われますが、福山ではどのような状況なのですか。
- (教科指導担当課長) 先ほど2教科、3教科の広島県の学力調査における小学校、中学校の通過率はご説明しましたが、30%未満の数値については、国語は、広島県の結果を越えています。30%未満の子ども達の数値も広島県より低く、2.1%となっています。全体的な結果として、フタコブラクダ型になっているかどうかについては、分析結果を持っておりません。
- (小原座長) いくつかの学力調査の委員を務めています。福山市と広島市だと、基礎基本のA問題型の学力は右肩上がりです。8割以上となっていますが、県平均より低い結果となっています。
- また、B問題、思考判断・表現型はフタコブラクダ型ではなく、キラウェア火山型と呼んでいる台地のように形であり、山のようになっていません。A層、B層、C層にどの層にも残っている形で、どのようにC層を減少させながら、B層を増加させ、右肩上がりに改善するかが課題になると思います。フタコブラクダ型の二極化について、どの学力が課題となっているのか、様々な分析を行う必要があります。
- さらに、調査を行っていないC型学力と呼んでいる学習意欲は、日本は非常に低いと言われています。もし、福山の子供達の意欲が高い状況であれば、10年、

20年後を見据えて、小中連携を通して育てるということも考えられます。学力については、地域や家庭の環境、学校の授業との関係性等、原因分析を行う必要があると思います。

(教科指導担当課長)

学習意欲についてですが、4年間の調査では、小学校の学習意欲はトータル的に低下し、中学校では逆に意欲が高まっている状況です。原因については、分析ができておりません。

(藤本委員)

学校外部評価委員会の委員を6年間務めていますが、学校は心の問題などのデータについて、良く分析されています。福山市は以前から小中連携、場合によっては、幼稚園から連携されている学校もあると伺っています。今回の一貫教育は、更に拡大された形態となるのかと期待して参加しています。

不登校を含めた課題のある子どもへの対応についてですが、一番大きな課題であると感じているのは貧困などの家庭環境であり、その兆候は小学校から既に始まっているため、スクールソーシャルワーカーなどの専門家で対応する必要があります。福山市ではスクールカウンセラーを配置していますが、今後はより専門性の高い方で対応し、地域と連携する必要があると考えています。

義務教育においては、地域の責任は非常に大きいものがあると考えております。子どもは小さい頃から地域が関わり、育てていかないと、少ない関わりだけで子どもを育てようとしても、難しいと思います。義務教育9年間の期間を使って育てることや、必要に応じて高校の3年間を含めた12年間をとおして関わる必要があるのではないかと思います。

(小原座長)

解説になりますが、全国的に小中一貫までの段階というものがあるようです。

小学校と中学校では文化が異なるため、最初に相互理解があります。公立学校へ進学する場合、小学校と受験の必要がある中学校では、取組事項や意識が異なりますので、その理由などを理解する段階になります。

少しずつ理解が進み、先生同士が親しくなると、授業を一緒に見合うなどの相互交流となります。交流が進むと、小中合同の音楽発表会や運動会を実施する連携の段階になります。

連携が更に進むと一貫の段階になります。小学校の取組を中学校で発展させて取り組むなど、カリキュラムがつながります。

更に進むと、めざす子ども像や目標をつなげ、小中学校間にある種の楔が打たれます。各学校で育てたい子ども像が異なり、目標に向かって取り組むなかで小学校と中学校がつながりを持たせる必要がある場合に、一貫となり、少しずつ発展します。各段階では常に相互理解を継続することも重要になります。

(小野明委員)

地域によって小中一貫に取り組み易いところや、逆に求めているところもあります。主任児童委員も含めて、学校や不登校の子どもに関わり、連携する必要があると思います。生活保護世帯で、学校や地域に馴染まずPTA活動等が上手くいかないということがありましたが、声をかけることで家庭が上手くいった事例があります。しかし、全般的にこのようなケースの対応は難しく、PTAでは解決できない場合がありますので、行政などを含めた対応を検討する必要があると思います。

(小原座長)

学校が拠点となり、家庭と地域が一体となって取り組むことは小中一貫の理念です。学力の向上をめざしても、先生が子どもと向き合い、良い授業を積み上げることしか、特効薬はありません。子どもと向き合い、授業ができる体制づくりを家庭や地域、教育委員会と一緒に取り組む必要がありますので、基盤づくりという点では非常に重要であると思います。

(岡本委員)

子ども会で活動させていただいていますが、球技、文化、ジュニアリーダー等の活動をとおして、子ども達の絆や、思いやり、感謝の気持ち、生きる力を重点的に養うことを目標としています。子どもを育てるうえで、地域の連携は不可欠であると考えていますが、数年前に学校選択制が可能になりましたね。ある中学校区の学校は荒れているという理由で、別の学校へ進学する傾向が見られていました。子どもは多くの友達が居る同じ中学校へ進学したいにも関わらず、親の考えで別の中学

校へ進学して、なかなか溶け込めないという話を聞きます。学校選択制度もいかなものかと思います。

(小原座長) 変化の激しい社会を生きる子どもを育てるために、必要な力について教育委員会は求めていますので、福山の子ども達が10年後、20年後の社会を担っていくための力という視点でも、ご意見をいただきたいと思います。

(貝田委員) 40年ほど教育現場におり、現在は、自治会連合会の代表ということで参加させていただいています。まず、学校での学びと家庭での生活、地域での生活が乖離状態であるのではないかと思います。世相を見ても、不安な時代に立たされている時に、その時代の思いを他に求めるのではなく、内に求めるような大人社会が必要でないかと思います。子ども達の現状に係る目に見えていない部分の資料もいただきましたが、先生方の指導力はわたしの教諭時代と比べても、向上しているのではないかと思います。地域のOBが子ども達に何を示すかという原点に立ち返らないと、思いを他者に向けるようでは課題の解決は難しいと思います。

(小森委員) PTAの代表としてこの場に参加させていただいています。親が望む子ども達の姿というものを考えましたが、なかなか見えてきません。

PTA連合会の会長となってから言い続けていることがあります。それは、家庭における教育力の充実です。各家庭が地域とつながりを持つとせず、独りで子育てをしている保護者が近年非常に多くなっているように思います。また、地域、学校の行事に参加しない保護者も増えています。PTAでも教育力を充実させるため、様々な取組を発信しますが、良い効果が見られません。

そのような状況のなかで、学力向上のために先生の指導力を上げようと取り組まれています。授業を受ける子どもがきちんとした生活習慣を身に付けているのが重要であると思います。朝食摂取率は上がっているようですが、その内容についても目を向ける必要があると思います。パン1枚であっても、子ども達は食べてきたと申告します。本来は主食や主菜等が揃った食事を摂ることが目的ですので、先生や学校が良い教育を行っても、聞く耳を持たない子どもが多ければ何も進展はありません。小中一貫教育を進めるうえで、更に取組を進める必要があると思います。

(小原座長) 質の高い生活習慣というものは普遍的なものだと思います。

(山崎委員) 小学校現場の代表ということで、校長会の代表をしております。

福山市内には小学校78校ありますが、それぞれの地域によって差があります。それぞれの地域による差が非常に強く、一括して話すことはできませんが、小中一貫はそれぞれの実情に合わせて取り組む必要があると考えます。

まず、現場の状況についてですが、学力が完全にフタコブラクダ型である地域もありますが、現状は様々です。地域によっては、保護者の仕事により、子育てをする時間が少なく、朝食を食べて来ない子どもがおりましたが、学校でおにぎりを冷凍し、食べさせることに取り組んだ結果、昨年度からそのような子どもがほとんど居なくなったとのことです。朝食を食べたかについては、自己申告としていますが、担任が気付いたり、子どもの申出があった場合には休憩時間等に食べさせているようです。しかし、食事内容については未だ課題が残っています。今後は、自分でパンを焼くなど、簡単な準備ができる力を付ける必要があると考えています。

学力問題についてですが、家庭学習が困難な環境である場合もあります。そのような状況では、改善のために保護者の力を借りることが困難ですので、子どもに関わりながら、自力で解決させることが重要であり、改善に向けて少しずつ取り組んでいます。

また、不登校についてですが、ある学校の一昨年と昨年の総出席日数、欠席日数と欠席回数を比較すると、欠席や遅刻が大幅に減少していました。登校時間も変わり、始業開始の5分前に登校していた登校班のほとんどが、10分前には登校するようになり、遅刻していた子ども達も、登校時間が早くなったようです。子ども達も落ち着き、学習面においても、授業が理解できる子ども達が増加傾向にあるよう

で、相関関係があるのではないかと感じています。学校での対応にも限度があるなかで、子ども達が良い方向に向いているのは、地域の基盤がしっかりしているなかでの取組の効果であると思います。

子ども達が社会に出て行くときに、どのような力を付ければ良いかということを考えますと、やはり夢や自分の目標を持てる子どもを育てる必要があると思いますし、子ども達にも伝えるよう努めています。

次に、発達障害のある子ども達もいますが、今の子ども達は、すぐに怒ったり、投げ出したりする子どもが多いように感じます。子ども達には粘り強く取り組むことや、我慢できる力を付けることが大切であると思っています。

また、困ったときに一人で抱え込まず、共有し、助け合えるようになることも重要であると思います。そのような子ども達が育てば、様々な困難にぶつかっても越えていけるのではないかと思います。

小学校と就学前施設についてですが、以前は子どもについての情報交換が上手く機能していませんでした。しかし、最近は情報交換や共有を行い、学校でも対応できるようになってきました。小1プロブレムは以前から問題となっていました。就学前施設と小学校の連携により改善できていると感じています。困難な状況を後回しにせず、その対応状況等を次の者に引き継ぐことが大切であると思いますので、小学校と中学校の各発達段階のつながりを、地域の実情に合わせて取り組めれば良いと思っています。

(飛田委員)

まず、中学校の生徒の実態を紹介させていただきたいと思います。4月末から5月にかけて多くの中学校が体育大会を実施しました。他校の校長からは、子どもの真剣な姿に感動したという話も聞きましたが、一方では逮捕事案も出ている状況があります。学校では先生の多忙化により一部の生徒への指導が難しく、経済的な面も含めた厳しい家庭状況や特別な支援が必要な生徒が増加していることが背景であると考えられます。

続いて、変化の激しいこれから社会を生きる子ども達の姿に係る、学校の役割についてですが、学校教育は以前から知・徳・体と言われており、確かな学力、豊かな心、健やかな体というのは、どのような時代においても子ども達に付けていかなければならない事が学校の使命であると思います。

とりわけ現在、マナーの部分について市内の中学校が力を入れています。あいさつを自ら行う、時間を守る、整理整頓ができるという事を各学校で徹底しようと取り組んでいます。この取組は社会に出ても必要になる力であると考えています。

また、キャリア教育は非常に重要であり、この教育で力を付け、将来的に社会で自立する生徒を育てたいと考えています。職場体験学習では、働く意義について学び、夢や目標に向かって何をすべきかについて自ら考えることができるよう取り組む事が学校に求められていると思います。

最後に小中一貫教育についてですが、本日の懇話会で小中一貫は手段であるというお話を伺い、勘違いしていたことに気付かされました。取組内容については、小学校と一緒に考え、各中学校区で取り組んでいます。常に不安があります。様々な情報や必須ポイント、手段や言葉などの取組の方向性についての情報を提供させていただきたいと思います。

昨日、校区の小学校2校とPTAが合同で会合を行いました。そのなかで、小中一貫教育について、具体的に教育懇談会を小中一貫に絞って取り組むことが決まりました。

また、芦田川一斉清掃では、小学校と中学校と一緒にボランティア活動を行いました。そのなかで、PTAから次回と一緒に取り組みたいと言ってもらい、非常に心強く感じました。やはり、PTAや地域との連携が大切であると思います。

(小野委員)

福山型という一貫のイメージが重要になるなかで、先行事例は大事になってくると思います。施設一体型や連携型について、方針等がありますか。

(教育長)

このたびの懇話会では小中一貫教育そのものを議論していただければと考えてお

ります。市長の議会答弁にもありましたが、将来的には小中一貫教育について規模の適正化も考えていきたいとしておりますが、現在は、現存の学校での小中一貫教育の取組によって、子ども達に福山が大事であるという思いを持ち、しっかりと次代を担う子ども達をそだてたいということが基本です。

今後の10年、20年後を考えたときに、少子化による学校の在り方等について考えざるを得ない状況にあると思っておりますが、この懇話会では、小中一貫をとおしてしっかりした土台を作りたいと考えており、その部分についてお話をいただきたいと考えております。

(小原座長)

本日、委員の皆様からいただいた意見をまとめますと、大きくは3点であると思っております。

1つ目は小中一貫教育を推進する土台として保・幼などの就学前施設との連携。更には、生まれてからの子ども達をその時期にしっかりと育てること。学校段階からの対応では遅く、3歳～5歳程度からの家庭・地域・PTAの連携は欠かせないものであり、そこが伴わないと小中一貫の中身が伴ってこないという事です。

2つ目が、変化の激しい社会を生きる子どもに求められる力というのは、新たな力ではなく、逆に高い生活習慣の維持やマナーを守ること、キャリア教育のなかで夢や目標をもつことなど、人間として普遍的に大切なものではないかということ。

もうひとつは、学習が成立しない層への対応と同時にリーダーを育てていく必要があるということ。二極分化している子ども達の実態に応じた授業を進めていく必要があると思っております。

そのうえで、小学校と中学校がつながって生まれる教育力は、先生同士がつながるということでもあります。

例えば、専科の体育の先生がいない小学校へ、中学校の体育の先生が来て跳び箱を跳ぶと、子ども達の目はあんなに跳ぶんだというふうになります。そのような意味では小・中学校の先生がつながることにより生まれる教育力もあると思っております。

あるいは、子ども同士がつながることによって生まれる教育力も大きいです。例えば、県や全国で活躍しているような選手が小学校で準備運動をするだけで、子ども達はあんなふうになりたいと思うようになります。子ども同士が会うことによって生まれる教育力も大きいと思っております。このような教育力を用いて育てている時に、豊かな心や成長保障に関わるマイナス面はありません。

これまでの経験ですが、成長保障については小中一貫により、かなり大きな成果があるのではないかと考えています。

学力向上、学力保障という点についてですが、学力については期待した成果を出すことは容易ではないと思っております。

学力についての特効薬はありませんので、実態分析に基づいた取組や先生がしっかりと子どもに向き合う時間が保証され、良い授業が出来るように、学校と地域が一体となること。また、保育所・幼稚園・小学校がつながることで家庭の教育力が向上されることがあります。そのなかで、これまで測定されていなかった学習意欲の向上、とりわけ表現力をどのように高め、バランスよく育てていくのかという視点で学力を捉えていくことが大事になってくると思っております。

知・徳・体についてですが、子ども達が世の中に出たときに生きて働くのは、知・徳・体のなかでも思考・判断や意欲です。これはOECDの調査において、10年、20年後にグローバルな企業が求める人材についてのアンケートで経営者側が選んだ内容も同じ結果になっています。1番目は好奇心であり、目標達成思考や積極性があるかというものでした。これらの項目はこれから社会に出た時に、効いてくる学力ではないかとOECD等が指摘しています。

また、それと同時に知・徳・体に加えて芸術の芸があるのではないかと考えます。アートや芸能、芸術もあり、それは人生を非常に豊かにするものでもあります。美しい音楽に出会え、良い絵を見ることができ、良いと思える力は今後の大きな力になります。知・徳・体以外に何か福山らしさがあっても良いのではないかと

思います。知・徳・体だけでは、音楽や美術の力は向上しません。学力は容易に向上するものではありませんが、アートは大事であると思います。

もうひとつは、学力の向上には普遍的なものが大事であり、さらに先生方がしっかりと向き合っていくためには、子ども達にもうひとつのモチベーションが必要なのではないかと思います。今の子ども達は良い大学や海外に留学しても、良い生活が準備されていないことは既に知っています。もうひとつのモチベーションとは、勉強することで世の中のためになる、人々の役に立つという社会貢献の意識です。先ほどキャリア教育にも出てきましたが、夢や志、希望を見つけていくということも良いと思います。子ども達が置かれている状況は非常に厳しいですが、その状況を乗り越えようとしたときに人々が持つものが希望であり、小中一貫を通じて、そのような子ども達を育てていきたいと思うのではないのでしょうか。

もうひとつ、このなかに知・徳・体と教師の力量形成というものがありました。やはり力量のある先生が子どもと向き合うということが基本的には大事になります。中学校では教科担任制ですから、授業について家庭科や理科の先生が意見を述べることはできないと思いますが、1人で全教科を教える小学校の先生と一緒にあれば、授業研究ができるようになります。小中連携で授業を見合うということは、重要ですが、レッスンであり、自分の授業をどう良くしていくかという視点です。教育実践研究と呼んでいますが、クラスの子どもや学力調査の実態を分析し、原因を考え、課題解決のために取り組み、その結果を検証する形に研修の質を変える必要があると思います。クラスの子ども達、あるいは、福山の子ども達をどのように高めていくかという視点で、研修・研究をしていくことが小中一貫を行うことの意味ではないかと思います。そのあたりも進めていければ、福山の小中一貫教育も全国発信することが出来るものが生まれてくるのではないかと思います。